愛媛大学教育学部紀要　第52巻　第１号　41～50　2005

希望の心理学について再考する
― 研　究　覚　書 ―

渡　辺　弘　純
（教育心理学研究室）

（平成１７年６月３日受理）

Reconsideration of the Psychology of Hope: Study Notes

Hirozumi Watanabe

１．はじめに

筆者は、学生を前にして、「願うことが現実をつくる」、願わなければ物事は始まらない、と述べるのが常であった。そして、この言葉と対にして、願っても叶わないときには、「レット・イット・ビー（Let it be）」の精神で、と続けていた。前者を希望として、すなわち、希望とは、願いや目標や欲求とほぼ同義語である、と位置づけていた。平塚らいてうは、『青鞜』創刊の辞を「烈しく欲求することは事実を産む最も確実な真原因である」と締め括っている（堀場、1988）[1]ではないか。我が高校時代の恩師で仏教詩人と評される坂村真民（1998）[2]は「念ずれば花ひらく」とうたっている。聖書には、「叩けよ、さらば開かれん」（新約聖書福音書マタイ伝）という一節もある。そんなことをたたみかけていた。一方、後者については、どんなに願っても叶わなかったときには、「神様が、あなたはその道でなく別の道へ進んだ方がいいよ（別の選択肢を選んだ方がいいよ）」と、あなたにとって本来歩むべき適切な方向を、語りかけてくれているんだ、すなわち、楽天的に物事を受け止めよう、と話していた。希望の救済としてのLet it be であった。Let it beは、希望とは別のものであると考えていた。しかし、現在は、願いや目標や欲求も希望の中に含まれるが、Let it beこそが希望の中核を成しているのではないか、と考えるようになってきている。

拙稿（渡辺、2002a）[3]においては、Snyder（2000a,b）[4]を引きながら、前者の枠組みの中で希望を展開していた。当時は、わが国における希望研究はほとんどない[5]と確信していたので、彼から学びつつ、新しい心理学をという思いがあった。そんな折に北村（1983）[6]の書物に出会うことになった。そこで、従来持っていた希望イメージが揺さぶられた。また、友人たちと日本心理学会で「希望の心理学」のワークショップ[7]を行ったのであるが、そこで、若い希望研究者（大橋、2002a）[8]に出会い、2004年には、日本心理学会で小講演[9]をお願いすることになったりした。さらには、若い友人たちが、相次いで、『希望の心理学』（白井、2001：都筑、2004）と題する書物を出版した[10]。このような背景の下で、希望について捉え直す必要性を痛切に感じることになったのである。

２．北村（1983）の希望についての定義的表現

北村は、「希望は来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情である」と定義的に表現している。ここで、「未来に明るさを見る、快い感情である」と捉えられている。拙稿において、希望は認知なのか感情なのかをめぐる議論を紹介したが、北村は、先行する認知から生まれる感情であると主張しているように見える。希望は、何によって引き起こされるにせよ、感情であるという主張として受け取ることもできる。これに対して、Lazarus（1999）[11]は、一方で、感情としての希望を、他方で、コーピング過程としての希望を述べる。そこでは、見方によって両側面から受け取ることができるとも、感情と認知の統合としての希望が述べられているとも読み取れる。感情と認知の両面を含んでいると捉える必要はないであろうか。そのように考えるとき、Lazarus の立場をそのまま採用すべきであろうか。Lazarusにおいては、希望があまりに明確なものとして表現され過ぎてはいないであろうか。もっと漠然とした、認知と感情が渾然一体となって融合したものとして描き出すべきではないかというのが、筆者の現在の主張である。その立場からは、北村が、その著書のまえがきで述

べている「希望は未来の状況が明るいという快調をおびる感情」である、という表現の方が適切なように思われる。その上で、「感情」という表現を止めて、「感情と認知の融合状態の表出」としてはどうであろうか。融合状態という地点で留めるべきかもしれない。あえて表出としたのであるが、いうまでもなく、内的な自己へ向けての表出であり、通常の表出とは意味を異にしている。

北村は、また、「希望は特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目ざすものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境域としての未来が信頼できるという明るい感情である」と続ける。彼は、希望を、「特定の目的の実現や目標達成にかかわる期待」、別の表現をすれば、「特定の好ましい対象や状況の出現の見込みや期待」と区別する。期待と密接に関連していることを認めつつ、先人たち[12]の論を引きながら、希望が固有の対象をもたない点で異なると対比する。そして、希望を欲望や意志とも区別する。欲望や意志が求める対象へ向かって働きかけを行うのに対して、希望は無条件的なものなのである。ただ、彼は、差異を強調することに対しては、問題があるとし、「欲望や意志の基礎に、未来に対する謙抑な希望があること、またはありうることを否定してはならない」としている。欲望や意志と同様、未来へ向けられたものであるという点では、希望と同一の方向を指している欲求や願望についても、欲望や意志についてなされた同じ理由によって、希望と区別している。希望を、目的や目標や期待、あるいは欲望や意志、さらには欲求や願望と区別する彼の考え方に対しては、賛意を表する。その上で、希望の中核ではなく、その外延に、目的や目標や期待、あるいは欲望や意志、さらには欲求や願望が布置している、と位置づけることが妥当であると考える。

北村は、「未来への信頼は一方では自分のうちに、他方では自分の外の世界や社会に求められる」とも、希望は未来への信頼であるが、「『未来の状況』には自己以外の環境的な状況と自己自身の状況とが含まれる」とも述べている。別の文脈で、内的希望と外的希望を区別している。すなわち、2つの希望があるという。そして、未来の明るさが自分のうちから生じ、外界の明るさを生み出したり、逆に未来の環境の明るさが自分自身の明るさを生み出したりするといった相互作用のなかにある、と続ける。この考え方は確かに妥当であり、押さえるべき内容であると思われる。この立場から、日本の子どもたちの現状を見るとき、2つの希望は、相互作用の中にはなく、分離している状況も少なくないのではないのか、という疑問も生じる。実際、社会と自己の未来像におけるギャップを指摘する研究も報告されている（白井、1990）[13]。

さらに、北村は、諸家の研究を取り上げつつ、希望の反対物として、絶望、危惧の念や不安を描き、希望と対比して、懸念や断念や諦念や心配や恐怖や苦悩について述べる。そして、「新しい希望が生じれば、多少の危惧も伴い、新しい危惧が現われれば、多少の希望の光もそれに伴うのが常である」と展開する。この説明は、まさに希望の本性を表しているように思われる。しかし、彼においては、希望の反対としての説明にほとんどの頁を費やしている。危惧や不安は、果たして希望の反対であろうか。希望と危惧や不安をコインの表裏をなすものであると捉え、希望を持つから危惧や不安が生じるのであるとの視点を前面に押し出していく必要がある、と考える。ちなみに、都筑（2001）[14]は、小学校から中学校への進学プロセスを検討し、小学校六年生の折に、未来への期待と不安の両方を持っていた子どもたちが、中学生になった時点での調査で、最も熱中するものを持っていると回答したばかりか、これから先の中学生活で最もやりたいことを持っている子どもたちであった、と報告している。

3．大橋（2002a）の北村の視点に立った研究の展開

大橋は、北村の立場を採用して、高齢者の希望とその関連要因に関する一連の研究を展開している。わが国において、希望に真正面から取り組んだ心理学における数少ない論文である[15]。その中に、Herth Hope Scale を取り上げた研究[16]が含まれている。彼が、北村の定義に対応する尺度であると言うHerthの希望尺度は、3つの下位尺度、すなわち「実存性と見通し(temporality and future)」、「前向きな構えと期待(positive readiness and expectancy)」、及び「自他の一帯感(interconnectedness)」から構成されている。各尺度は、大橋によれば、次のように説明されている。「実存性と見通し」は、「私にとっ

て、これからのことは楽しみだ」、「私にはこれから先の計画がある」、「私は何があっても時が解決してくれると感じている」、「私はつらい時でも明るいきざしを感じることある」など、「ポジティブで望んでいた結果が近い未来あるいは遠い未来におこりうるという知覚を中心とした質問項目であり、未来に対する明るい感情を尋ねるもの」である。「前向きな構えと期待」は、「私は気力に満ちている」、「私は心や体が傷ついてもへこたれない」、「私はいつもよいことがあると感じている」、「私は自分の考え方次第で自分の人生は変わると感じている」など、「望ましい結果をもたらす計画への取り掛かりに関する自信の感情をとらえるもの」である。また、「自他の一帯感」は、「私には愛する者がいる」、「私には自分に安心感を与えてくれる心のよりどころがある」、「私は親しい人から支えられている」、「私は愛され、必要とされている」など、「自己と他者、自己と精神との相互依存やつながり感」からなっている。

北村の定義的表現とHerthの尺度は、果たして対応しているであろうか。「私にはこれから先の計画がある」との項目は、北村に沿った内容なのかなど、多少の違和感が残るけれども、第一尺度については、未来への信頼が中心にあり、未来への信頼と明るさであるとする北村の立場から説明することができる。しかし、第二尺度や第三尺度は、北村の定義とぴったり合っているであろうか。第二尺度に含まれる「私はいつもよいことがあると感じている」は、北村の線上にあることは確かであるが、その他の項目は、「私は気力に満ちている」などいずれの項目も、これは自己信頼の尺度であると直感する。また、第三尺度は、「私は自分の人生に意義や目的があると感じている」の項目については、北村に沿った項目であると考えることもできるが、その他の多くの項目は他者信頼の尺度項目だと考えられるものである。実際、天貝（2001）[17]の他人への信頼尺度との相関は.74にも達していた。これらのことを総合するならば、北村の定義に必ずしも対応しているとは言えず、むしろ、エリクソンら（エリクソン・エリクソン／朝長・朝長訳、1990）[18]の希望の定義に対応していると言える。Herthの尺度は、Eriksonの自己信頼と他者信頼が基盤にあり、その上に北村の希望概念が乗っていると解するのが適切ではないだろうか。

同時に、このような内容的な対応関係の検討だけでなく、リッカート法による調査が、北村の定義的表現に似つかわしいか否かを吟味することが求められる。筆者は、質問紙法を採用するのであれば、ＳＤ法[19]による接近の方が、似つかわしいと考える。たとえば、私の人生、私の10年後、私の現在、あるいは私の過去を刺激語として挙げ、これに対するイメージを、明るいー暗い、暖かいー冷たいなどの形容詞対で評定するのである。その上で、北村は、未来が明るいという感情によって希望を表現するのであるから、私の現在と私の10年後の差をとり、これを指標として、探究することはできないであろうか。

もちろん、大橋は、Herth Hope Scale を取り上げた研究だけを行っているわけではない。彼の研究の中心は、高齢者を対象とする自由記述調査や「人生の語り」といった面接法による調査である。ここでは、北村により近い形での検討が進められている。その一つである自由記述調査（大橋・恒藤・柏木、2003）[20]を取り上げることにする。

彼らは、高齢者の希望をもたらしたり弱めたりする事象とその際に生じる感情を問い、その回答を整理している。「あなたは、どんな時に、未来に明るいきざしを感じますか」、「どんな時に、これから先どうにかなると思いますか」、及び「どんな時に、将来に可能性があると感じますか」という質問自体が北村に沿ったものである。そこでは、希望をもたらす事象を体験した際の感情を、「時間に対する快調な感情」、「積極的な感情」、及び「自他の一帯感」の三つに区分している。「時間に対する快調な感情」は、「将来は必ずよくなる」などの「未来に対する感情」、「気分がすっきりした」などの「現在に対する感情」、及び「若い頃の気持ちになる」などの「過去に対する感情」から構成されている。一見、過去に対する感情は、希望と無縁に思われるが、過去を現在の地点でポジティヴに意味づけ直す作業は、未来への明るさをもたらすのである。「積極的な感情」は、「気力が湧いている」などの「高揚感」と「知識欲が湧いている」などの「目標へ向かう意欲」から構成されている。そして、「自他の一帯感」は、「周囲の人に感謝」などの「他者との一帯感」、「太陽や宇宙に手を合わせられる」などの「超越者・自然との一帯感」、及び「人生は楽しい」などの「人生の統合」から構成されている。この「つながっ

ている」感覚、あるいは靭帯感は、必ずしも北村と同一内容でないかもしれない。しかし、いくつかの疑問点があるにしても、大橋による高齢者を対象とする自由記述調査や面接調査においては、北村の定義的表現に近い希望が取り扱われている。

4．Snyder（2000a,b）の希望理論と北村の希望に関する定義的表現との共通する側面

Snyderらは、「目標（Goals）、経路（Pathways）、及び発動力（Agency）の３つの構成要素（ingredients）からなる希望理論（Hope Theory）を展開している。そこにおいて、①目標には多様なものが想定され、その価値の検討が求められていること、②経路には、目標達成向けてのルートへの思考、ルート選択の多様性、障害に出会った時の対処などが含まれ、計画（plan）や結果期待（outcome expectancy）と類似した側面があること、③発動力は、動機的な構成要素であり、目標へ向けての運動を引き起こし、それを維持する信念を反映し、効力期待（efficacy expectancy）と類似した側面があること、などについて検討されている」（渡辺、2002a）。彼らは、極めて精力的に、病院に通院したり、入院しているクライエントなどを含む多様な調査協力者を得て、多数の論文を公表し、彼らの希望概念の有用性を実証的に示している。

Snyder（2000a）の希望モデルにおいて、目標が非常に重要なものとして位置づけられ、現在時点では、必ずしも十分に検討されていないが、多様な目標が組み込まれるとき、希望理論が一層魅力的なものになると論じている。しかし、その一方で、実際に使用されている彼らの尺度においては、目標は完全に無視されている。たとえば、多くの研究者が引用する論文The will and the ways[21]は、その名の通り、Will とWays、すなわち、発動力と経路の下位尺度から希望尺度が構成され、目標の下位尺度はないのである。言い換えれば、エネルギーとやり方によって、希望を操作的に定義しているともいうことができる。具体例として児童用の希望尺度[22]を取り上げれば、次のような項目から成り立っている。①　私はかなりよくやっていると思う。②　私の生活にとって、とても大事なものを手に入れるために、多くのやり方を考えることができる。③　私は、私と同じ年のほかの人と同じくらいにはやっている。④　こまったことがあるとき、私は、それを解決するために、多くのやり方を思いつくことができる。⑤　私は、私が今までしてきたことが、将来、私を助けてくれる、と思う。⑥　他の人がやることをあきらめようとするときでも、私は、こまったことを解決するやり方を見つけることができる、と考える。ここで示されるように、彼らの尺度に目標が含まれていないのは、それぞれに多様な人々の目標を、現状では未だ考慮することのできない研究水準にあるというのであろうか。それとも、別な理由があるのだろうか。詳細は不明である。

Snyderは、希望の認知的な側面を重視すると自らの立脚点を提示しており、希望は感情であると明確に述べる北村と対照的に考えられるが、その一方で、Snyderが希望をどのように定義するにせよ、少なくとも彼の尺度においては、「特定の目的の実現や特定の目標への到達」が全く含まれていないという点では、北村と同じ立場、すなわち、希望を固有の対象を持たないものとして、描いているのである[23]。そして、一見して明らかなように、経路であれ発動力であれ、Snyderの希望項目の全てが、自己信頼に裏打ちされているのである。Snyderの希望尺度を自己信頼の尺度であると言ったとしても、誰も異を唱える者はいないと思われる。未来への信頼という言葉を使用する北村とは異なるが、少なくとも同じ「信頼」という中身を、希望に込めていると言う点でも、北村と共通している。彼の尺度項目は、通常の人々が持つ希望とは異なっている。そのために、筆者らは、日本と米国と中国で希望調査を実施するに際して、「私は、明日は今日よりももっと良くなるだろう、と思っている」、「将来、私は、自分の目標を達成することができるだろう」などの項目から成る別の「私の希望尺度」を作った程である[24]。いうまでもなく、ここにも自己信頼の内容が込められているが、それに将来が明確に加算されているのである。Snyderには将来の加算が不明確なように思われる。

Snyderが、彼の定義そのものの展開として実証的な研究を進めたのではなく、その尺度に具体的な目標を含めず、また、自己信頼の内容を込めたことによって、本来の希望に近づいたーその理由によって、彼の実証的研究

が多くの実りある成果をあげることができた、という説明を行う論者が出ないとも限らないのである。

5．Snyder（2000a,b）の希望理論と高垣（1999、2004）[25]の自己肯定感との関連と相違

Snyderの希望尺度が、自己信頼の尺度である、と気づいたとき、わが国の教育現場でこのところ多くの人が語る自己肯定感との共通性に思いを走らせてしまうのである。自己肯定感は、Self-Esteemの日本語訳[26]の一つであるといわれている。いうまでもなく、Self-Esteemは、通常は、自己評価やセルフ・エスティームや自尊感情や自尊心と翻訳されている。

自己肯定感の重要性を指摘する高垣（2004）は、一般における自己肯定感の使われ方が、Self-Esteemの日本語訳のように使用されていることに対して、適切でないと主張する。すなわち、高垣の（共感的・共生的）自己肯定感は、他者と比較した折に生じる「自分の能力や特性、自分のもてる富や権力」の優劣に根拠を置いた感覚ではない。別の言葉でいえば、「自己肯定感は決して、自分には自慢できるところがあるから、人よりも優れたところがあるから、自分を肯定するという感覚ではな」く、「自分のダメなところや弱いところ、悪いところをも含めて自分が存在していることはいいことなのだ、許されているのだと、自分をまるごと肯定する存在レベルの自己肯定感」なのである。繰り返すならば、このような無条件的な自己肯定感は、「『あれができる、これができる、ここが素晴らしい』という能力や特性の値打ちを評価し、確認させることによって、育てるようなものではない」。彼は、登校拒否の青年が、料理とケーキづくりに自ら打ち込む姿を例示しつつ、失敗や試行錯誤の体験を通じて、「自分を『相手』に関らせていけば（対象と対話していけばー筆者）、『具合』がわかってきて、なんとかなるだろうという『感覚』を体得していくこと」が大きな意味を持つのではないか、という。この感覚は、「『対象』を一方的に操作し、コントロールするような関係」ではなく、「『対話的』な関係のなかで、何かができあがっていく手応え、そのことへの信頼感」のなかで、また、失敗しても、大きな存在に抱かれて、大丈夫と許される、そんな体験のなかで生まれるのである。彼は、まるごと受け入れられ、愛される共感的な人間関係のなかで生まれる、ともいう。彼のいう「自分が自分であって大丈夫」という感覚である自己肯定感は、「大丈夫」という「安心感」、自分の存在がそのまま許されるという「安心感」、それが「核心」なのである。彼にあっては、市場原理の支配する競争社会において染み込まされた他者評価を気にする心性が自己肯定感とは無縁なものであるというばかりでなく、自己評価さえも自己肯定感の文脈に入り込ませないのである（高垣、1999）。

高垣の地点からSnyderの希望項目を眺めると、他者との比較、及び自分自身の評価にもとづく「（競争的）自己肯定感」であることが明確になる。Self-Esteemの尺度として最もよく知られるローゼンバーグ[27]の尺度項目は、因子分析をした折、2因子に区分されることがある。その場合、筆者などは、一方は他者との比較による評価の色彩が濃く、他方は自分自身の基準にもとづく評価の色彩が濃い、と説明し、自分自身の基準に照らしての評価こそが本当の自尊感情だと感じていたのであるが、高垣の視点から見ると、いずれの側面も、評価に依存した「自己肯定感」ということになるのであろうか。

筆者は、彼の指摘から、Rogers（1951,1959）[28]やErikson（1959）[29]が真っ先に連想されるのであるが、彼は、自己愛との関連性、関連性というよりも、自己愛そのものであると論を進めていくのである。

自己愛は、長らくFreud 流のナルシシズムが影響力を行使していた。しかし、近年になって、KernbergやKohutの健康な自己愛の考え方が取り上げられるようになっている。筆者は、高垣（2004）が、Freudの立場からではなく、健康な自己愛の考え方に近い意味づけをしていると推測する。それはともかくとして、高垣は、いわゆる「『自己愛』とは、自分が価値ある存在と思いたがる心である」ため、それと区別して、「自分を愛する心」[30]という言葉を使いたいという。彼のいう「自己を愛する心」は、「何か物差しをあてて、自分に価値があろうが、なかろうが、そんなものは関係ない」、無条件的に「自分が生きているそのこと自体に、かけがえのない価値がある」、「そのことを感じたとき、そのことに気づいたときに、自然に生じる心」だという。この自己を愛する心は、「たとえ他人に対する恨みや、嫉妬のような否定的な感情が生じても、そういう自分を『ダメな奴』

と否定しないで、そのままに受け入れる」、「それが、『ありのままの自分』だと受け容れ、自分を赦す、自分自身とたたかい、自分自身を責めることをしない」。否定的感情を否定しないで受け容れるからこそ、その感情にとらわれることもなく、その感情が「成仏」するというのである。彼は、彼のいう自己肯定感といわゆるSelf-Esteemとの関係が、そのまま、自分を愛する心と自己愛との関係にあてはまる、と言っているように思われる。自分を愛する心と自己肯定感との関係を、次のようにも表現している。「共感的な愛が得られない人間は、自己肯定感が感じられない不安や空虚さを補うために、ナルシスチックな『自己愛』に陥り、自分の外観や能力、あるいは業績・地位によって自分がいかに値打ちのある人間かを確認したがる」、「自分を大げさに見せびらかし、賞賛を得ることに一生懸命になることもある」。彼においては、自己肯定感と自己を愛する心は、ほぼ同義なのである。

6．高垣の自己肯定感や自己愛のとらえ方とエリクソンら（1990）の考え方との関連

さきに述べたように、高垣の自己肯定感や自己愛のとらえ方は、エリクソンらの考え方と共通する面が多いと考えられる。発達に対しての考え方や発達段階などの枠組みの設定を除外すれば、全く同じ内容について語っているとさえ、筆者には思われる。

周知のようにエリクソンは、人間の８つの発達段階を区分している。そして、彼によれば、それぞれの段階の心理社会的危機を乗り越えつつ、次の発達段階へと導かれていくのである。その第一段階では、信頼対不信という心理社会的危機を乗り越えることが発達課題となる。この危機については、さまざまな書物のなかで、繰り返し論じられている。

『ライフサイクル、その完結』（エリクソン・エリクソン／村瀬・近藤訳、2001）[31]では、「基本的不信対信頼：希望」という項において、まず出生について述べ、両親やその存在を心から喜ぶ祖父母を持つ乳児は幸せだという。ここで、無条件的な他者からの愛情について触れている。そして、「現に生きている人は、皆、基本的信頼を獲得し、それによってある程度まで希望という強さを得ているということになる。基本的信頼は希望の証であり、この世の試練と人生の苦難から我々を守る一貫した支えである。」と続ける。次には、高齢者に目を転じ、「（老人は―筆者）ぎこちない身体の動きに毎日さらされ、しかも日々そのぎこちなさが増えていくという事態に向き合い、慢性的な屈辱感や急性的な屈辱感に襲われ、希望はいとも簡単に絶望へと道を譲ってしまう」、「しかし、老人はすぐさま、夜になれば太陽は沈むということを受容し、毎朝太陽が輝きながら昇るのを寿いで見るようになる」、「光ある限り希望がある」、と展開している。

また、拙稿（渡辺、2002a）でも取り上げたように、エリクソンら（エリクソン・エリクソン/朝長・朝長訳、1990）は、「基本的信頼と不信の間の緊張は、人生の極く初期にまで遡る。その時期の健康な乳児は、頼りになる支えと反応を環境が与えてくれる中で絶えず育っていく信頼を通して、希望の源を発達させる。人間が、宇宙への確信及び信念の感覚と宇宙の法則から関連して予測できることを、その同じ宇宙について抱く弁別的な用心深さと疑惑、その現実的な予測不可能性と依存不可能性などとを統合しようと努力することで欠くことのできないこの力は、ライフサイクル全体を通して成熟する。」、「理想的には、乳児の極く最初の感覚的意識性の基礎となっていく希望感の力は、次第にあまり直接的には認識し得ない経験の領域との、生涯に渡るかかわりのための基礎となる。この最初の基本的な力は、後に続くすべての心理社会的な力が健康的に発達するための支えとなる。」など、と述べている。

すなわち、エリクソンは、人生の最初のステージにおいて、お腹がすけば、お乳をもらい、寒くなれば、暖かい衣服でくるんでもらう、といった無償の無条件的な相互作用のなかで、希望の源が育まれ、その希望感が、人間の発達のすべての過程を支え続ける、というのである。他者から支えられることを通じて他者信頼を、そして、自分は他者に支えられるにたる存在であるという自己信頼を、育てていくのである。他者信頼と自己信頼によって産み出されるのが希望に他ならないのである。このようなエリクソンの考え方からすれば、大橋が、希望の内容の一つとして自他の一帯感などを含める考え方は、まさに正当なものなのである。大橋の希望には、北村と同

時にエリクソンの考え方が色濃く反映していると読み取ることもできるのである。

エリクソンにおける希望は、他者からの評価や自分が優れているという自己評価から産まれるわけではないのである。したがって、いわゆるSelf-Esteemとは、一線が画されている、といえる。エリクソンらの信頼対不信の相克から産み出される希望は、高垣の意味する自己肯定感や自分を愛する心すなわち自己愛と非常に近い考え方なのである。筆者は、同じであると考える。そして、両者の核にあるものが、安心感であると考える。その上で、筆者は、それに「自己安心感」と命名したいと思っている。

自己肯定感がどこから生まれるかについて、高垣は、エリクソンが希望がどこから生まれるかについて語っている内容と同様な過程、を描いている。高垣は、まず、真木（1993）[32]を引いて、生物の個体の一生は、成長期と生殖期と後生殖期の三つから成り、子孫を産んだ後も生きることができるようになって、哺乳とか保育といった社会性の発達が表面化するという[33]。次いで、彼は、広井（1997）[34]に学びつつ、「『哺乳』され『保育』される『ケア関係』のなかで、『自分』が生まれ、『自分』を肯定する（共感的・共生的―筆者）自己肯定感が生まれるということである」と、述べるのである。このような展開は、エリクソンそのもの、あるいはエリクソンを拡充している、と言っても間違いではないと考えられる。そのように位置づけると、高垣の共感的・共生的自己肯定感とは、希望なのではないか、と思われてくる。エリクソンであれば、そうである。さらには、それがあるから、「見捨てられる」ことを恐れず、古いものにしがみつかず、跳ぶことや飛び立つことができるという彼らしい意味づけのセーフティネットも、イコール希望と呼んでもよいのではないか、と考えられるのである。しかし、北村（1983）の地点から見ると、明日などといった何かが足りないようにも感じられるのも事実である。また、肯定的なものと否定的なものが交じり合った心の状態が希望だとすれば、自己肯定感は、ただひたすら肯定的なもの一筋のようにとらえられるのである。この点でも、北村の希望とは異なっているように見える。

7.「うまくいかなくても、うまくいかなくても、きっと明日は」と思う感覚、「Let It Be」としての希望

日本臨床発達心理士会中国四国支部が開催した2005年の研修会[35]で、紅谷博美氏は、稲村博[36]の図を引きながら、最近の不登校の傾向について要約した。その図は、縦軸に「学校での成功や順応を求める圧力の増大」（School Pressure）をとり、横軸に「同輩間の抗争（攻撃性やサディズム）の増大」（Peer Pressure）をとっていた。右肩上がりでの図で、最近になるにつれて、両者の増大が顕著になってきているというものであった。氏は、縦軸を、「耐性未発達」に、横軸を、「社会性未発達」に、それぞれ言い換え、今後の悲観的見通しについて語った。家庭でも、学校でも、甘やかして育て、困難を克服するという体験の蓄積がないからがまんするという耐性が発達せず、また、子ども同士が関わりあう体験を持たないから社会性が発達しない、そのために、不登校傾向は増大の一途をたどる、と説明した。縦軸についての説明を聞きながら、なるほど最近の子どもたちは、ちょっとうまくいかないことがあると、すぐに、あきらめたり、切れたり、パニックになったりするのだなと思ったりした。しかし、がまんすることや耐性という言葉はいかにも閉塞的な言葉であるため、「うまくいかなくても、うまくいかなくても、何とかなる」といった意味での希望という言葉に置き換えた方がいいのではないか、と自分の研究に引き付けて、考えていた。このように考えるのは、筆者だけではない。さきに取り上げたメゾンヌーヴ（メゾンヌーヴ／山田訳、1955）は、貪欲な先見や楽天的な怠慢である楽観主義と区別して、希望とは、忍耐や謙虚さをもつことである、と述べているのである。また、フロム（フロム／作田・佐野訳、1970）[37]も、希望を不屈の精神と関連づけている。さらに、山田（2004）[38]は、ランドルフ・ネッセ（Nesse, 1999）[39]の「苦労の免疫理論」[40]を引いて、日本の社会状況が「苦労や大変さに耐える力（＝希望）」をもちにくくさせていると論じている。

高垣（2004）は、「『何でも思いどおりになる』という『幼児的万能感』を引きずったままで大きくなってきている」、「だからちょっとでも思いどおりにならない嫌なことがあると、我慢できずに『切れて』しまうのだ」、

何でもすぐに欲しいものを手に入れることができ、「我慢して欲望を抑制する経験が乏しく、欲求不満に対する耐性が鍛えられていない」などといった一般的な考え方を紹介した後、このような見方が全くあたっていないとは思わないが、「こういう見方でいまの子どもたちの示す諸現象を裁断することに賛成することはできない」という。彼は、ほんとうに、特別扱いされ、大事にされる子どもが、多数なのか、と疑問を呈する。なかには、能力や特性を持っているがゆえに尊重される子どももいるには違いないが、そのような子どもは、「親や祖父母の期待に応える『よい子』であることと引き替えに、大事にされているのであって、無条件で大事にされているわけではない」という。そして、「『＜よい子＞でないと見捨てるぞ』という『脅し』の教育や子育てのなかで、見捨てられて自分の無価値感や自己否定感に打ちひしがれていたり、『見捨てられる不安』におびえ、自由にありのままの自分を表現したり主張したりできずに、我慢を強いられている子どもが圧倒的に多い」と続ける。そんな子が、ある日、バランスを崩す物事に出会って、耐えきれなくなって、切れるのだという。競争的自己肯定感のなかで自分を位置づけている子どもが、何かの拍子につまずくと、共感的・共生的自己肯定感という安心感がないから、切れざるを得ないのだというのである。「うまくいかなくても、うまくいかなくても」切れないで、明日を思い描くことが希望のある状態だとすれば、その根元の自己肯定感が育まれていない、すなわち、セーフティネットが張られていないのである。

エリクソンにおいては、信頼対不信の心理社会的危機を乗り越えること＝希望なのであるが、高垣は、基本的信頼感と同様な内容を、共感的・共生的自己肯定感と表現している。著者は、独断で、一言も希望という言葉を使用していない高垣の考え方が、希望と関連していると指摘したいのである。共感的・共生的自己肯定感の代わりに自己安心感[41]という用語を使用したいと思う筆者も、高垣と同様、これを希望と呼ぶことに躊躇する。エリクソンにしても、「希望の源」と言っているのであるから、希望そのものとの間に距離をおいているともいえる。そこで、本稿では、希望の基盤として、高垣の自己肯定感、筆者の自己安心感、そして、エリクソンの基本的信頼感を置くことが適切だということにしたい。実際、拙稿（渡辺、2002a）では、希望が信頼を生み、信頼が寛容を生む、すなわち、＜希望→信頼→寛容＞の研究枠組みを提案したのであるが、このような研究枠組みは否定された[42]。その代わりに、希望と信頼の密接な相互関連が、どの調査からも明らかにされると同時に、出発点に信頼が置かれる＜信頼→希望→寛容＞という研究枠組みが支持されたのである。

希望は、自己安心感の基盤の上に立って、その安全基地の上に築かれるものではないであろうか。高垣が問題にしているのは、希望の基盤形成における今日の困難さではないかと思われる。この点については、問題を共有することができる。すなわち、希望の土台が揺らいでいるという認識である。親や教師や大人あるいはその反映として子ども自身が、市場原理や競争原理にもとづいてする評価が、絶えず、希望の基盤、すなわち自己肯定感を脅かし続けることは理解できる。しかし、相対的に安定的した基盤を確立している子どもにおける他者との比較、あるいは自分自身の基準による評価を全て否定しなければならないのであろうか。子ども自身の発達を評価することさえも排除すべきであるというのであろうか。この点は、高垣もよく理解しているように思われる。彼自身が、「子どもを見る『共感の目』と『評価の目』」の両方の目で見ることが大事だというところにも現れている。とりわけ、子どもの外側からでなく、内側から見るとき、子ども自身が他者と比べることは、否定的にばかり見る必要はないと考えるのである。あこがれを持って、あの人のようになりたいと思うことが、積極的な意味を持つことも多いと考えるからである。社会的比較については、別の機会に論じることにする。

本稿を閉じるに際して、現在の時点での、希望について考えるところを記しておきたい。希望は、今日と明日、及び他者と自己とのつながりの感覚を基盤として生まれる。すなわち、希望にとって、時間と空間、タテとヨコのつながりの感覚が必要条件である。しかし、この自己安心感は希望そのものではない。これを基盤にして生まれる希望を、北村に即して表現すると、「未来が明るいという快調を帯びた感情と認知の融合状態の自己へ向けての表出」とでも、言えるであろうか。あるいは、「今日が明日へとつながっているという未来の明るさへの信頼の感覚」と、表わされるであろうか。この意味で、探

究途上の大橋の研究は、Hertheの尺度による研究を含めて、希望を全体としてとらえようとした試みであると評価することができる。しかし、並列的に列挙するにとどまらず、層構造的に把握することが求められる。

1　堀場清子　1988　青鞜の時代―平塚らいてうと新しい女たちー　岩波新書
2　坂村真民　1998　詩集　念ずれば花ひらく　サンマーク出版
3　渡辺弘純　2002a　希望の心理学へ向けてー研究覚書―　愛媛大学教育学部紀要, 48（２）, 27-42.
4　Snyder, C. R. 2000a　The past and possible future of hope. *Journal of Social and Clinical　Psychology*, 19（１）, 11-28. Snyder, C. R.（Ed.）2000b *Handbook of Hope: Theory, Measures, and Applications*. San Diego: Academic Press.
5　希望については、『教育と医学』誌（慶應通信、1990）が特集し、勝俣暎史　1990　希望の心理学　教育と医学　38, 309-314.などが報告されていたし、『人文学と情報処理』誌（勉誠出版、2001）も希望の心理学について特集を組んでいた。また、白井利明　2001　青少年は社会の希望をどのように語るか　心理科学研究会編　平和を創る心理学―暴力の文化を克服するー　ナカニシヤ出版, 32-43.や実証的研究としても、篠原弘章・勝俣暎史　2001　熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性（１）：中学生の「感情・態度」および「希望」との関係　日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 87.があった。さらに、都筑学氏は、1999年夏、大阪大学で「希望の心理学」をテーマに集中講義を行ったとのことである。しかし、筆者は、本格的にライフワークなどとして展開されたものはないと信じていた。
6　北村晴朗　1983　希望の心理―自分を生かす　金子書房：北村氏との出会いに不思議なものを感じる。1980年、心理学生誕100年を記念して、ドイツのライプチヒで開催された国際心理学会議の時、Wundtの実験室を訪ねたのであるが、その部屋で、墨で連判状のように円形に漢字の氏名が列記された編笠を見つけた。その中に北村晴朗の名前と仙台にてという文字があった。後に、東北大学で日本心理学会が開催された折に、その由来を氏自身に直接確かめたが、仙台でブント会が開催されていたことの記憶のみで詳細は不明であった。また、1989年秋、初めて訪問したミシガン大学のスチーヴンソン教授の研究室の机上に、墨で、明けましておめでとうございます、とだけ書かれた北村氏の年賀状を見つけた。
7　渡辺弘純　2002b　ワークショップ「希望の心理学」話題提供者「日本の子どもの希望の現状」　日本心理学会第66回大会論文集, S31.
8　大橋明　2002a　高齢者の希望とその関連要因に関する研究　大阪大学人間科学部行動学専攻／大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻　卒業・修士・博士論文要約集―平成13年度, 1-4.
9　大橋明　2004　高齢者の希望の概念および規定因　日本心理学会第68回大会発表論文集, L３.: 小講演の司会を筆者が担当した。
10　白井利明　2001　希望の心理学―時間的展望をどう持つか　講談社現代新書：　都筑学　2004　希望の心理学　ミネルヴァ書房：いずれも時間的展望の研究者の著書であるが、前者は、時間的展望研究の展開としての希望が堅実に取り上げられたものとして、後者は、時間的展望を超えて、新しく希望を掴み直そうとするものとして、読むことができる。
11　Lazarus, R. S. 1999 Hope: An emotion and a vital coping resource against despair. *Social Research*, 66（２）. 653-678.
12　たとえば、メゾンヌーヴ, J.／山田悠紀男訳　1955　感情　白水社
13　白井利明　1990　現代青年の未来展望における対社会関与に関する研究（１）―中学生を対象にー　大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門）, 39（１）, 59-73.
14　都筑学　2001　小学生から中学生への進学にともなう子どもの意識変化に関する短期縦断的研究 心理科学, 22（２）, 41-54.
15　大橋（2002a）は、わが国で初めての心理学領域での希望を直接主たる対象とした実証的研究としての博士論文ではないであろうか。
16　大橋明　2002b Herth Hope Scale日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討　老年精神医学雑誌,　13, 1187-1194.　原尺度は、次の論文を参照のこと。Herth, K. 1991 Development and refinement of an instrument to measure hope. *Sch. Inq. Nurs. Pract.*, ５（１）, 39-51.
17　天貝由美子　2001　信頼感の発達心理学―思春期から老年期に至るまで　新曜社
18　エリクソン，Ｅ．Ｈ．・エリクソン，Ｊ．Ｍ．・キヴニック，Ｈ．Ｑ．／朝長正徳・朝長梨枝子訳　1990　老年期―生き生きしたかかわりあい　みすず書房
19　岩下豊彦　1979　オスグッドの意味論とＳＤ法　川島書店
20　大橋明・恒藤暁・柏木哲夫　2003　希望に関する概念の整理―心理学的観点からー　大阪大学大学院人間科学研究紀要,29,101-124.
21　Snyder, C. R., Harris, C., Anderson, J. R., Holleran, S. A., Irving, L. M., Sigmon, S. T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. 1991 The will and the ways: Development and validation of an individual-differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60（４）, 570-585.
22　Snyder, C. R., Hoza, B., Pelham, W. E., Rapoff, M., Ware, L., Danovsky, M., Highberger, L.,Rubinstein, H., & Stahl, K. J. 1997 The development and validation of the Children's Hope　Scale. *Journal of Pediatric Psychology*, 22, 399-421.
23　都筑学氏は、かつて筆者に、「目標や期待や欲求などは、従来明確に定義づけられてきている、それで説明がつくのであれば、希望を持ち出す必要はない、もしも、あえて希望を取り上げるとすれば、従来の用語では定義づけられていない、漠然とした、あいまいな中身を込める必要があるのではないか」と語ったことがある。
24　渡辺弘純・渡邉俊・Crystal, D. S.・中嶋恵美　2004　日本の児童生徒における希望、信頼、寛容の発達とその相互的関連　愛媛大学教育学部紀要, 50（２）, 21-39.
25　高垣忠一郎　1999　心の浮輪のさがし方―子ども再生の心理学　柏書房：最近では、高垣忠一郎　2004　生きることと自己肯定感　新日本出版社　が出版されている。
26　自己肯定感という用語は、日本における造語ではないかと考えていたのであるが、高垣（2004）によれば、Self-Esteemの日本語訳だと説明されている。
27　Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Academic Press.：因子分析では、これをリッカート尺度化した、山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30, 64-68.の項目群が用いられた。
28　Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Houghton Mifflin.（ロジャーズ, C. R.／友田不二男訳　1965　ロージャズ選書２精神療法（９版）岩崎書店）
Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S.（Ed.）*Psychology: A study of science. Vol. 3*. McGraw-Hill.（ロジャーズ, C. R.／伊東博編訳　1966　ロージャズ全集４　セラピィ・パーソナリティ・対人関係の理論・サイコセラピィの過程　岩崎学術出版社）
29　Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*（*selected papers of E. H. Erikson*）. New York: Int.Univ. Press.（エリクソン, E. H.／小此木啓吾編訳　1973　自我同一性―アイデンティティとライフスタイル　誠信書房）：　鑪幹八郎　1990　アイデンティティの心理学　講談社現代新書　は、エリクソンの要を得た得た紹介として読むことができる。
30　高垣氏は、あえて「安心感」といった新しい用語を使用しないで、現在いろいろな意味を担わせられている「自己肯定感」を使用し、この「自己肯定感」に氏独特の意味を担わせている。新しい用語を使う必要はないであろうか。このような彼の立場からいえば、「自分を愛する心」という新しい用語を使用するより「自己愛」に氏独特の意味を担わせ、健康な自己愛として使った方が整合性がある、と思うのであるが、いかがであろうか。
31　エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M.／村瀬孝雄・近藤邦夫訳　2001　ライフサイクル、その完結　＜増補版＞　みすず書房
32　真木悠介　1993　自我の起源　岩波書店
33　鮭のように生殖直後子孫を残して死ぬことがなくなれば、すぐに社会性が発達するといっているわけではない。ここでは、途中の過程を省略していることが乱暴な記述であることを十分承知しつつ、展開している。
34　広井良典　1997　ケアを問いなおす　ちくま新書
35　2005年５月14日愛媛大学教育学部で開催された。紅谷博美氏を講師とする研修会のテーマは、「不登校再考」であった。
36　稲村博　1994　不登校の研究　新曜社　など子どもの問題に関する

著書多数。

37 フロム, E.／作田啓一・佐野哲郎訳　1970　希望の革命　改訂版―技術の人間化をめざしてー　紀伊国屋書店

38 山田昌弘　2004　希望格差社会　筑摩書房

39 Nesse, R. M. 1999 The evolution of hope and despair. *Social Research*,66（２）, 429-469.

40 山田（2004）は、「社会に出る前に『小さな苦労』に出会い、その苦労が報われるという経験をしておくと、苦労に対する免疫ができ、社会に出てからも大きな苦労に対し、希望をもって対処することができるということ」と、説明している。

41 他者抜きの自己というニュアンスを読み取られるかもしれないが、他者との関わり合いのなかにある自己が、安心して、その場に自己を委ねることができるという感覚を意味している。

42 現在振り返ってみると、希望、信頼、及び寛容のいずれの尺度にも問題点が含まれている。